早稲田大学庭球部における指導法

The method of instruction in the Waseda University tennis team

1K09A102　　佐々木　啓
指導教員　主査 土屋純 先生　　副査 宮本直和 先生

【緒言･研究目的】

早稲田大学庭球部の監督である土橋監督は監督就任２年目で男子部を大学王座テニス決定試合で優勝に導き、３年目で女子部も優勝に導いて、2012 年までに連覇を男女７連覇を達成している。また、就任してから個人戦でも多くの全日本学生テニス選手権優勝者を毎年のように輩出するなど輝かしい成績を残している。本研究は、早稲田大学庭球部の強さを指導の仕方や組織論、環境、現役部員の感情などから分析し、スポーツチームの技術、組織力の面を強化する方法を明らかにすることを目的とした。

【研究方法】

土橋登志久監督、男子コーチ2名に対するインタビュー調査、現役庭球部員に対するアンケート調査を実施した。

【研究の結果と考察】

スポーツチームの強化には、チームを牽引する監督の力が大きいことがわかった。監督が毎日のように指導を行うスタイルは、大学テニス界では主流のやり方ではなく、就任当時では珍しいものであったが、最近では他の大学もそのような指導者を招聘しチーム強化に務めるようになった。監督が日々選手の状態をチェックし、油断や慢心という心の隙を作らせず常に向上心を持って練習させるように厳しく接するという徹底した指導が連覇を途切らせない大きな要因であることは間違いない。

コーチも自身の役割を監督と学生の調整役として様々な場面に臨機応変に対応して両者の手助けになろうとする意識が高く、学生と距離が近い社会人として接する姿勢でもって学生の人間性の向上に繋げたいという気持ちを持って指導にあたっていることがわかった。

学生も厳しい環境で意識の高い仲間と切磋琢磨することで自らのテニスや人間性といった力を高められる。それがチーム力に直結し部内に良い循環として代々受け継がれていく。このような良い流れを作るのも指導者の最初の役割ではないだろうか。庭球部員が庭球部の環境や指導に概ね満足しており、テニスに精一杯打ち込めているという実感を抱いていることがアンケートからよくわかった。

また、団体戦において部員にはそれぞれの役割がある。選手で試合に出場する者や補欠の選手、他大学の分析、ベンチコーチ、審判、ボールパーソンなどの役割を部員一人一人与えられているが、その役割を全うしチームの勝利のために尽くしているとの自己評価が高く、これが早稲田大学庭球部の団体戦での強さにつながっている。土橋監督が監督就任してから2年目から男子は、3年目から女子は公式団体戦無敗の大きな土台となっていることは間違いないといえる。

【結論】

早稲田大学庭球部の強さの理由を、指導者と学生からの様々な質問の回答から探ることができた。スポーツチームの強化には、強い信念を持った軸のぶれない指導者による指導と、指導者と学生との距離間を臨機応変に調節して社会人としての立場から庭球部を支援しているコーチ陣の指導、大学生活を部活動のテニスに捧げようという気持ちで入部し、勝つための努力を惜しまない学生の意識が重要であることが明らかになった。これらの要素が互いに良い刺激を与え、高めあって全日本学生テニス王座決定試合男子８連覇、女子７連覇や全日本学生テニス選手権大会でのタイトルの独占をはじめとした偉業を成し遂げることができた。

しかし、庭球部には練習日程や時間に多くの部員が不満を抱いていること、指導の不均等、ノンレギュラーの待遇改善などまだまだ改善の余地がある。また、プロ選手を志す者が少なくなっている事実もあり、卒業してから庭球部との関係は希薄な OB が多いのも非常に残念なことである。これらは課題の一例であるが、今後克服して早稲田大学庭球部が日本のテニス界のみならず、世界で活躍できるようにさらなる鍛錬に励んでほしい。